
秘密な私

peach-pit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘密な私

【Nコード】

N3124D

【作者名】

peach-pit

【あらすじ】

ある秘密を持っている雅渚。みやびなぎさ いしだみのすけ石田実介という男に出会い。渚の運命が激変する。

秘密

私は雅渚^{みやびなぎさ}。夢の吉学園高校に入学した高1！私にはある秘密がある。
。。。

「ええ！渚ちゃんって不良？！」
^{なぎさ}

「しー！しー！！声大きいよ」

「だ、だって・・・ビックリしちゃって・・・」

「普通だけど？」

そう、私は・・・不良（元）なんです！

「だってさ、渚ちゃん・・・可愛いし、美人だし、髪サラサラだし、
素直だし、背高いし・・・。不良なんて思えないよ・・・」
^{なぎさ}

「七海・・・」
^{ななみ}

そんなに思ってたくれたなんて・・・。

「嬉しいよ！嬉しいよ、七海〜！！」
^{ななみ}

私は七海^{ななみ}に抱きついた。

「く・・・苦しいよ〜。渚ちゃん！」
^{なぎさ}

「わ〜ゴメン！！」

私は急いで体を離れた。

「やっぱ不良なんだねー！力強い」

「ハハハ・・・」

そんなことで再確認されるとは……。

彼女は、ゆめはらななみ夢原七海。私の大大大親友。

「ねーね！ななみ渚ちゃん好きな人いないの〜？？」

「え？！いないよ！そんなの……」

「えー！バリバリいそうなのになあ〜」

そ……そんなイメージが……。

「ななみ七海はいるの？」

「いるよ〜」

「誰？！」

「さかきしんじ榊新二君」

「ええ？！」

あ、あの……！

あの……！

成績優秀。スタイル抜群のあの人〜？！

「ライバル多そう……」

「多いよお！大変なんだ！！でも頑張る——！」

「「ファイトお！」」

頑張れ。ななみ七海……。

そんなことを考えてたら

ド
ン
ッ

誰かがぶつかって来た。

「誰だコ
ラ
ア
？！」

私は不良の時の癖でキレるとマジヤバイ。

「ひいッ！」

「あ
ん
？」

よく見ると、男がいた。

「誰だお前？」

「お……俺は……行田光輝……」

コイツ・・・、完璧ビビってるな・・・。

「ふうん。お前アタイになんか恨みでもあんのか？」

「い……いえ!! ちょっと急いでぶつかっただけです!!!!!!」

「あ。そ。じゃあ早くどっか行きな」

「で……でも資料が……」

「資料？」

足元をよく見ると資料が散らばっていた。

光輝^{こうき}って奴は資料を集め始めた。

「しゃーねーな！アタイも集めてやるよ」

私と光輝^{こうき}って奴は資料を集めた。

「よし！これで全部だ！！」

「あ・・・ありがと・・・」

「まー！アタイもアンタをビビらせちまったからな！！次は気をつ
けるよ」

「おう！」

「おめー調子のんな！！」

「は・・・はいッ！」

光輝^{こうき}って奴はスタコラサッサと去って行った。

「なゝぎゝさゝちゃゝんゝ」

七海^{ななみ}の体が震えていた。

「ン？」

「不良って・・・怖いね」

「だゝいじょうぶ！！私を怒らせなければいいだけだよッ」

「うん！そうだね！！」

って！

私が元不良だから悪いのに、なんでえらそうに言ってるのよ！！

渚^{なぎさ}のバカッ！

この会話がある奴が聞いていた・・・。
私はそいつに気づかなかった・・・。

真実

私は学校の帰り、人気の無い道路を歩いていた。

「雅……渚？」

背後から低い声が聞こえた。

振り向いてみると、帽子をかぶった男が立っていた。

「誰だお前？」

私は不良の時の口調で聞く。

「覚えてねーのか？」

「お前なんか頭の隅にも残ってねーよ！」

「ほー？」

男はそう言つと、急に足をあげて私に蹴りかかってきた。

「おっと」

私は軽々とよけた。

「やつぱり……元ヤン隊長にはこんなもん楽勝か……」

「あゝん？なんでアタイのことそこまで知ってんだよ……？」

蹴りかかってきたあの感触……。

ただ者じゃねーな……。

「だって俺……」

男はそう言いながら帽子をとった。

「現役ヤンキー、元副隊長、いしだみのすけ石田実介だ」

元……副隊長……？

え。まかさ……

「え？もしかして……みの実ちゃん？！」

「そうだよ。やっと思い出したか、なぎさ渚」

やっぱり……

いつも冷静で、私の暴走を止めてくれて、私を支えてくれた……
みのあの実ちゃん？！

なんか……大人っぽくなってる……。

背も伸びたような……。

「で？アタイに何か用？？」

「……ヤンキーにまた戻ってくれないか？」

「……え？どうゆうこと？？」

「今の隊長が暴走してるんだ。仲間達もみんな止められなくて……
俺でも無理なんだ。それで、なぎさ渚にそいつの暴走を止めてもらって、
また隊長になってほしいんだ……」

「……無理よ」

「なんでだよ……！」

「ヤンキーやめる時言っただでしょ？」

――2年前――

私この頃はヤンキーの隊長をやっていた。

「隊長！またあいつらが借金を返しやせん！！」

「はあ？！マジかよ・・・」

「どうする渚？」

「うーん・・・よし！アジトに突入だ！！」

「ういっす！」

私達は借金を5年も返さない奴らのアジトに潜入した。

「グッ」

「うわっ」

次々と部下達を倒していった。

「おめーがボスか！」

「ふんっ！何しに来た？」

「とぼけんな！借金返せやボケエツ！！！！」

「なんのことだ？」

「コノヤロオ！！」

私はボスに殴りかかった。

数分後、

ボスの顔は腫れあがり、ヤバイ状態だった。

でも私はやめなかった。

「や、やめろッ！渚なぎさ！！」

実みのちゃんが私の暴走を止める。

「はなせ実みのちゃん！」

「我慢するんだ！！」

「・・・ッ」

私は舌打ちをしたが実みのちゃんにめんじて我慢する。

「す・・・すみませんでしたあ」

ボスは腫れた目から涙を流していた。

「いますぐ借金を返せ。そしたらゆるしてやる」

「わか・・・」

「まてッ！」

ボスの言葉をさえぎり、高校生ぐらいの男の子がやって来た。

「悟さとる・・・」

え・・・！

コイツ・・・。

私は固まった。

「渚なぎさ？どうした？？」

そう、コイツは私が小学校の頃好きで好きでたまらなかった大好きな人だった。

「さと……る君？」

「え。雅？！お前ヤンキーだったのか……。かつこわりいな」

がーん

か……。かつこわるい……。
最悪だあゝ。

「それより雅！この人を見逃してくれ！！金なら俺が払う。だから。
……」

私はショックのあまり……

「はあ？アンタが今払えるっての??」

愛しかった人にこんな口調で言ってしまった。

「今は無理だ……。でも！いつか必ず返す！」

「信じらんねーな。アタイ達はこの人を5年も待ったんだ。今すぐ返し……」

悟君はその場に座り込んだ。

「殴れ！この人の変わりに殴れ！！元はと言えば俺のせいなんだ！
！」

なんで……？

なんでこんな奴のために・・・。

「もういい。何年でも待ってやる。ただし！5年以上経っても返さなかったら・・・お前の命ねーから」

私は悟君わたけの胸ぐらをつかんで言った。

「・・・分かった」

「野郎ども！退却だッ」

「「ういっス！」」

私達がアジトの入り口に着いた時、

「雅！^{みやび}」

悟君わたけに声をかけられた。

「何」

「俺・・・はつきり言ってビビった。あんなに可愛かったお前がこんなかつこ悪くなって・・・。ヤンキーなんてやめろよ？俺、そんなお前嫌いだ」

そう言っいて悟君わたけは去って行った。

“そんなお前嫌いだ”・・・か。

私はその後すぐにみんなに話した。

「野郎ども！よく聞け。・・・アタイは今日で隊長とヤンキーをや

める!!」

「なんでだよ!」

「隊長やめんなよー」

そう言う声が聞こえた。

「渚^{なぎさ}なんでだ?」

「アタイは今まで人を倒したり、物を壊したり普通にしてきた・・・でも、もうそんなことがアホらしくなったんだ!!だから・・・ワリイ」

私は頭を下げ、自分のアジトから去って行った。

そして私はヤンキ-をやめた。

――2年後――

「そうだけど!俺達には渚^{なぎさ}が必要なんだ!」

「アタイはもうやめたって言ってるんだろッ!」

「・・・ってかさ」

「あゝん?」

「今の話聞いているとまだその悟^{ちとめ}って奴のこと好きってことか?」

「だまれコノヤロオ!!!!!!!!!!」

バキッ

私は実ちゃんみのの頬を殴った。

「へへッ。あん時と全然変わんねーな」

実ちゃんみのは殴られたにもかかわらず、普通の顔をしていた。

「そいつのためだけに辞めたのかよ」

「・・・だまれ」

「アタイの気持ちしんねーくせに偉そうに言うんじゃねー!!」

「知るかよ渚なぎさの気持ちなんか!」

「もーイヤなんだよ・・・。嫌われんのは・・・」

「・・・渚なぎさ・・・」

私の目にはいつの間にか涙が溢れていた。

「もう・・・1人はイヤだ・・・」

「渚なぎさは1人じゃねーよ!」

「え・・・?」

「俺がいんじゃないッ」

実ちゃんみのは二カツと笑った。

「実ちゃんみの・・・」

「まーまた考えといて!」

そう言って実ちゃんみのは去って行った。

・
・
・
あんなにと言われたけど
・
・
・
ぐっぐぐ
・
・
・
。

勝負

今は授業中。

でも・・・集中できない。

昨日のことで悩んでいるからだ。

その時、

ガラッ

教室のドアが開いた。

みんなが一斉に見る。

そこには色黒で金髪の男がいた。

「雅渚^{みやびなぎさ}はどこだあ！」

男は私の名を呼ぶ。

「隊長。あそこに・・・」

実^{みの}ちゃんが隊長に私の居場所を教える。

なんで教えんだよバカあ！！

男はスカズカ近づいて来る。

「お前か・・・」
「何？」

私は教室ということもあり、少し落ち着きながら話す。

「ちょっと来い」

そう言って男は私の手を引っ張りながら中庭へ向かった。

――inn中庭――

「ンで？何だよ」

「俺と勝負だ！！」

「はあ？」

意味わかんない。

なんで初対面の奴と勝負しなきゃなんないんだよ。
私・・・何かしたかな？？

「俺の名は、かるいぞわしゅじ軽井沢修二。現役ヤン隊長だ」
「あんたが今の隊長？！」

コイツが・・・。

コイツ暴れるんだあ。

「現役ヤン隊長か元ヤン隊長どっちがつえーか勝負しろ」
「アタイは・・・もう戦わないって決めたんだ！」
「うるせー！！」

軽井沢は殴りかかってきた。

私は軽々と交わし、その拳を掴む。

「クソッ！なんで勝負しねーんだ」

「だからもう戦わないって言ってるだろ」

「勝負しろ！ボケエエエ！！！」

「ボ・・・ボケエ？」

「そうだ卑怯者だ！」

「元ヤンってことは先輩だぞ？！その先輩に向かってボケって・・・」

「そんなこたー知るか！」

コイツ・・・。

ちよつとこらしめるか！

「調子乗んなコノヤロオ！！！！！！」

私は軽井沢の腹を殴った。

「グッ」

軽井沢はその場に座り込んだ。

そして座り込んだまま足を横に出し、そのまま蹴り回してきた。

「わっ！？」

私は足をとられた。

軽井沢は私の足を掴み、私の体を振り回して木にぶつけた。

「うつ」

私は立つ事が出来なかった。

「渚なぎさ!!」

実みのちゃんが現れた。

「み・・・のちゃん・・・」

「お前、戦うのかよ」

「これで・・・最後の戦いだよ」

そうこれで終わる。

もしかしたらココで死んでしまうかもしれない。

でも、いい。

やることはやるから。

後悔はきつとないと思うから。

「実みのちゃん協力して」

「え?!」

「アイツを倒したいの。でも・・・今のアタイの力では無理なの。だからお願い」

実^{みの}ちゃんは黙り込んだ。

「・・・分かった!」

実^{みの}ちゃんはそう言っ^て私の腕を引^つ張り、体を起^こしてくれた。

「よし!行くよ!」

「ういっス!」

実^{みの}ちゃんは軽井沢^{かるいざわ}の背後に回^り、背を押^した。

その衝撃^{かるいざわ}で軽井沢^{かるいざわ}は私に近づ^いて来^た。

そして私は軽井沢^{かるいざわ}のアゴを上向^きに殴^つた。

軽井沢^{かるいざわ}の体は空中へと上^がる。

体の軽^{みの}い実^{みの}ちゃんはジャンプし、跳^び蹴^りを決^めた。

数秒^{かるいざわ}後、

軽井沢^{かるいざわ}はこ^うさん^した。

「雅渚^{みやづなほみ}・・・」

「何^だ?」

「・・・隊長^みに戻る気^はねえ^のか?」

「ねえよ」

「そんなつえーのか？」

「・・・つえーよえーの問題じゃねーよ
「jana」

私は教室に戻った。

今の時間は休み時間だった。

「渚ちゃん！」

七海が小走りで近づいてきた。

「だ、大丈夫だった？」

「うん 平気だよ！」

これでいい。

こんな平和でいいんだ。

・・・なのに、どうして胸がモヤモヤしてるの？

渚の決意―戻る―

私はその日夢を見た。

私がまだヤンキ―で隊長をやっていた頃の夢。

私はとても楽しそうだった。

・・・でも、今はちがう。

そう思ったら暗闇に飲み込まれた―・・・。

ガバッ

私は起き上がった。

「なんで・・・あんな夢を・・・」

本当は思い出さなくなかった。

思い出したら戻りたくなってしまうから・・・。

今は夜中の4：00。

まだ寝ていたいけど目が覚めてしまった。

「はぁゝ・・・。ヤンキゝか」

私はまだ悔いを残していた。

なのに戻ろうとしない。

嫌われたくからだ。

もう誰にも嫌われたくない・・・。

ゝピンポーン

チャイムが鳴った。

私は一人暮らしなので私が出るしかない。

「もお・・・。こんな夜中に誰?!」

ガチャッ

「あゝいゝ?」

そこには実^{みの}ちゃんが立っていた。

「よお」

「なに？」

「・・・わりい起こした？」

「いや・・・、さっき起きたばっか。入れば？」

私は^{みの}実ちゃんを家に入れた。

「で？どおせヤンキーのことでしょ？」

「わかってんじゃーん・・・そうだよ！」

^{みの}実ちゃんは最初はふざけたが、しらけた空気を読んでまじめになった。

「戻らないよ」

「そう言うなよ」

「はあー・・・。何度言ったって一緒！！決意は変わんねーんだよ」

^{みの}実ちゃんは黙り込んだ。

「あいつのせいなのか・・・？」

「はあ？」

「あいつがまだ好きなのか？」

「だまれ！」

「ごまかすなよッ！！」

^{みの}実ちゃんは私の体を壁にぶつけた。

「何すんだテメエ！！」

「好きなのか？」

^{みの}実ちゃんは私がキレてるのにビビりもせず真剣に口を開いた。

「好きだったよ……。でももう嫌われた……」

「じゃあもう嫌われねーじゃん」

「わかんねーよ……。もしかしたら実ちゃんに嫌われるかも……」

「

「俺は嫌いにはなんねーよッ!」

実ちゃんは私の言葉をさえぎった。

「俺と仲間の皆は全員ぜってー嫌われねーよ!だって……」

「みんな渚なづなが好きだか」

「え?」

みんなが私を……?

「ほ……。んとうに?」

「あたりめーだろ!」

実ちゃんみのは私に向かってピースをした。

私の目からぼろぼろと涙がこぼれた。

「私……。戻る……。みんなをもう一度……。信じるよ」

午後0：00。

私は自分のアジトへ実^{みの}ちゃんに向かった。

「あ！隊長！！」

みんなが私のことを覚えていてくれた。

「デメエら……。悪かった！！もう一度……。戻っていいか？」

「あたりめーだろ！」

みんなが私を認めてくれた！

もう一度信じてみるッ！！！！！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3124d/>

秘密な私

2010年10月27日08時11分発行